

1 軒の住宅が変えていく新興住宅地での暮らし

- 「匂い」が繋ぐイキイキとした街-

1170076 鈴木 航平

指導教員 渡辺 菊真

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

1. 背景

1-1. 新興住宅地に思う

私は新興住宅地に魅力を感じる。昨今、新興住宅地に対しては魅力よりもマイナスなイメージを持つ人が多い。私は、生まれてから高校を卒業するまで兵庫県神戸市の新興住宅地で暮らしていた。しかし、そこにいる暮らしの中で魅力は感じていたが、それを明確に説明できる訳ではなかった。

現在、大学に通うため郷里の新興住宅地を離れて高知県で暮らす中で、集落に赴く機会が増え、その場所特有の人々の暮らしや季節、時間、天候、自然が醸し出す「匂い」とも言える感覚の魅力に気付いた。

そして、神戸市に帰省した際、新興住宅地には高知県とは違う新興住宅地特有の「匂い」が存在し、非常に魅力的であると感じた。そしてそれは、暮らしている時に漠然と感じていた魅力の正体であると気付いた。

こうした経験から、新興住宅地特有の「匂い」の魅力は、そこにいる暮らしの中では感じ難いのではないかと考えた。

1-2. 「匂い」とは

「匂い」は広辞苑*1、辞書*2 等から以下の意味が挙げられる。

- ・そのものから漂ってきて、嗅覚を刺激するもの。
- ・いかにもそれらしい感じ・趣
- ・芸能や文芸で、表現の内にどことなくただよう情趣・気分・余情。
- ・視覚を通して見られる、鮮やかに美しい色合い。
- ・人の内部から立ち現れる、豊かで生き生きとした美しさ。
- ・はなやかで、見栄えのすること。威光。栄華。
- ・声が豊かで、つやのあること。

以上の事から、「匂い」は五感全ての働きで感じられ

る情景の表現に対して用いられる様々な意味を持つ言葉であることが分かる。よって、ここで扱う「匂い」は情景を感じる主たる要因となり、嗅覚を主とするが五感全ての働きで感じているものであると定義する。

そして、「匂い」は大きく 5 つの要素の関係によって生み出されていると考えた。その要素を五感との関わりも含めて下記に示す。

- ・春、夏、秋、冬等 1 年における季節毎の情景の「匂い」。(嗅覚、視覚、触覚)
- ・朝、昼、夜等一日における時間毎の情景の「匂い」。(嗅覚、視覚、触覚)
- ・雨や風、日光等の天候の情景と天候そのものが醸し出す天候の「匂い」。(嗅覚、視覚、聴覚、触覚)
- ・土、植物、山、川、海等によって醸し出されている自然の「匂い」。(嗅覚、視覚、聴覚、触覚)
- ・料理やお風呂、ガス、廃棄物等、人が暮らしから醸し出される暮らしの「匂い」。(嗅覚、視覚、聴覚、触覚、味覚)

以下に、私自身の体験から「匂い」が複数の感覚と要素が絡み合って成り立っていることを示す。

- ・高校に通っていた時、冬の夕飯時に帰路を自転車で行き、料理やお風呂から醸し出されている「匂い」に、人がそこで暮らしている暖かみを感じた。これは冬という季節の情景の「匂い」、夕飯時という時間の情景の「匂い」を嗅覚と視覚と触覚で感じ、料理やお風呂という暮らしの「匂い」を嗅覚と聴覚で感じている。

以上のことから、「匂い」は嗅覚を主として五感全ての働きで感じており、5 つの要素が複雑に絡み合って形成されていると言える。

1-3. 新興住宅地の「匂い」

新興住宅地の「匂い」の魅力は高知県の集落で感じ

た「匂い」の魅力とは大きな違いがある。それは人々の暮らし方に大きく関係している。

まず高知県の集落で感じた「匂い」の魅力としては、個々の住宅の暮らしの「匂い」が混ざり合い、一体感のある一つの魅力的な集落の暮らしの「匂い」として存在していることである。そして、その暮らしの「匂い」からその集落で昔から生活が営まれて来たことや、住人同士の距離の近さを認識でき、蓄積されてきたその場所の歴史や人の繋がりを大切にする暮らし方を感じることが出来る。しかし、集落として一体感のある「匂い」であるが故に、集落の住人以外の人間は立ち入り辛い重みのある「匂い」とも捉えられる。

次に新興住宅地の「匂い」の魅力としては、個々の住宅が明確に違う暮らしの「匂い」を生み出し、その暮らしの「匂い」が混ざることなく個別的に自由な在り方で存在することである。そして、その暮らしの「匂い」から様々な人の存在とそれぞれが自由で気軽な暮らし方をしてることが認識でき、人々の暖かみと暮らしを身近に感じることが出来る。これが新興住宅地特有の「匂い」の魅力であり、集落の「匂い」と大きく違う部分である。

1-4.新興住宅地の現況と問題点

新興住宅地には前述のような「匂い」の魅力が存在する。しかし、現在の新興住宅地はその魅力を無理に保持しようとしている空間や、保持することもできずに破綻している空間が存在している。このような問題点のある空間の存在によって、新興住宅地の「匂い」の魅力は感じ難く、そもそも「匂い」の存在にすら気付けない状況になっている。ここでは、新興住宅地の多くを形成する戸建て住宅に着目して考える。

まず、「匂い」の魅力を無理に保持している具体的な空間としては各住宅に設けられている庭が挙げられる。隣接する住宅や住宅正面の街路からの視線が気になり、庭は設けられるが塀や植物等の目隠しがないと利用し難い。よって、生活感が現れず、プライバシーは確保されるが自由で気軽な暮らしの「匂い」は発露されない状況となっている。加えて、住人は庭に出る機会も少ないため、住宅の外に存在している季節、時間、天候、自然の「匂い」にも気付く難い。

次に、「匂い」の魅力が破綻している具体的な空間として、隣地境界部に存在する気まずい空間が挙げられる。新興住宅地における戸建て住宅は密度の高い合理的な住宅配置により、隣接する住宅との間隔が狭く、隣地境界部に気まずい空間が生まれている。そのため、

プライバシーも確保されず、自由で気軽な暮らしの「匂い」も発露されない状況となっている。そして、これらの空間の存在によって新興住宅地に暮らす人々は隣人に対する配慮も薄くなってしまっている。

以上の問題点を改善した住宅を提案することで、そこにいる暮らしの中で新興住宅地特有の「匂い」の魅力に気付き、高めていくことができるのではないかと考えた。



写真 1,2 利用し難い庭と気まずい空間

しかし、全ての住宅が建て替わると、新興住宅地特有の魅力であるはずの、個々の住宅が明確に違う暮らしの「匂い」を生み出し、その「匂い」が混ざることなく個別的に自由な在り方で存在する状況が、中途半端に一体感を持ってしまう。

そこで、1軒の住宅が建て替わることで、周囲の住宅に影響を与え、建て替わる際には各住宅がそれぞれに考える「匂い」の魅力を感じる住宅へと変わっていくことが新興住宅地の変化としては相応しいと思い、1軒の住宅が建て替わることに着目して考えた。

2. 目的

本設計では、1軒の住宅が建て替わることで、その住宅の住人だけではなく、周囲の住宅の住人にも影響を与え新興住宅地特有の「匂い」の魅力に気付き、その魅力を強化出来る戸建て住宅の提案を目的とする。

3. 敷地の選定と読解

3-1. 敷地の選定

今回の設計にあたって、私自身が高校を卒業するまで暮らしていた兵庫県神戸市西区にある西神住宅団地を対象の新興住宅地として選定した。

次に選定した西神住宅団地の中から、戸建て住宅で形成されている典型的な住宅配置を持つ区画を選定し、その中から戸建て用の敷地を選定した。この敷地は、私自身が高校生の時に通学路として幾度も通っていた場所であり、「匂い」の魅力を実際に感じた場所である。



写真 3,4 *3 対象の新興住宅地と対象敷地位置図

3-2.対象敷地の建築制限

対象敷地の用途地域は第一種低層住居専用地域であり、建築制限として以下4点の制限がある。

- ・建蔽率 40%
- ・容積率 80%
- ・斜線制限 第一種高度地区
- ・壁面後退 1m

3-3.敷地と周辺環境の読解

対象の西神住宅団地は神戸市のベッドタウンであり、通勤の関係からこの場所に住むことを選択している人が多い。対象敷地は北東方向に密度高く合理的かつ街路に挟まれるように住宅が配置されている。住宅前の街路は通勤・通学時には通行する人もいるが基本的に、その区画の住人以外は利用していない。そして、この対象敷地は1-4で述べた問題点が生じている場所でもある。

対象敷地の構成から南東に正面を持つ住宅と北西に正面を持つ住宅の2種類の住宅について考える。

4.設計

4-1.住宅と「匂い」

本設計の目的を達成する為には、建て替わる住宅の住人が「匂い」の魅力を感じることに加えて、周囲の住人にも影響を与え、「匂い」の魅力に気付ける必要がある。そこで、建て替わった住宅の住人が「匂い」の魅力を感じられることに加え、その住宅が「匂い」を発露し、周囲の住宅の「匂い」をも誘発することで周囲の住人の暮らし方も変えていくことを考えた。これらを満たすために、以下4点を用いて設計を行った。

- ・「匂い」溢れる中庭
- ・隣人の「匂い」を誘発するボリューム
- ・「匂い」のスクリーン
- ・「匂い」と暮らすプランニング

4-2.「匂い」溢れる中庭

現状の庭の使い難さは、住宅の塀にいくら改変を行っても隣接する住宅や街路から受ける視線の気まずさから解消されない。そこで、住宅の内側に庭を持つ中庭型の住宅とした。そうすることで住宅から外部への意識が無くなり、隣人との気まずさも解消される。このように、庭が私的な自由空間となることで、生活感が現れ、「匂い」がそこから発露する、「匂い」溢れる中庭となる。

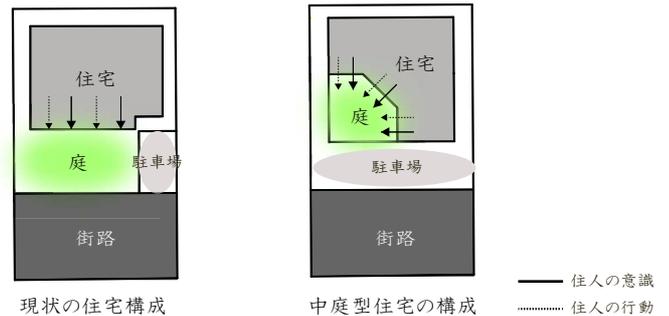


図1 現在の住宅構成と中庭型住宅の住宅構成

4-3 隣人の「匂い」を誘発する住宅ボリューム

まず、住宅と中庭の面積と配置については、建蔽率と容積率の制限を考慮した上で決定し、壁面後退1mの制限を満たす配置とした。

次に住宅のボリュームは、第一種高度地区の制限を満たし、かつ建て替わる際に周囲の住宅との違和感を与えないように周囲の住宅の高さに合わせて決定した。屋根勾配は隣接する住宅への直射日光を遮らない高さになるように決定した。こうすることで、裏側の住宅にも日が差し込み、洗濯物を干したり、庭で遊ぶというように生活感が現れ始める。結果として、隣人の「匂い」を誘発するボリュームとなる。

4-4.「匂い」のスクリーン

「匂い」のスクリーンは、嗅覚の次に「匂い」を感じる為に重要な視覚と、醸し出される「匂い」を運んでくる風を利用して図2のように3つの空間で形成した。

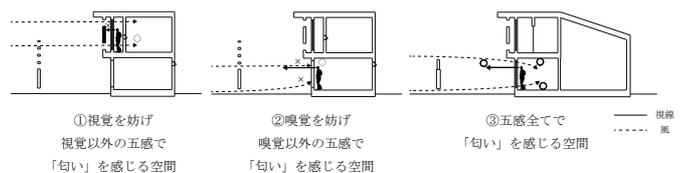


図2 「匂い」のスクリーンを形成する3つの空間

③の「匂い」を五感全てで感じる空間と、①と②の

一つの感覚を妨げて「匂い」を感じる空間を対比させることで、より「匂い」の存在と魅力に気付きやすくなると考えた。また、①の視覚を妨げ視覚以外の五感で「匂い」を感じる空間は、住人に対してだけではなく、街路や隣人からの視線も防ぐ。

「匂い」のスクリーンは、「匂い」の魅力を感じるためだけの空間として居室に設けるのではなく、日々幾度も利用する通路空間に設けることで、ふとした瞬間に「匂い」を認知でき、魅力を感じるができるようにする。

4-5. 「匂い」と暮らすプランニング

まず、「匂い」を発露する中庭を配置し、同様に「匂い」を発露する台所は街路側に配置した。次に「匂い」のスクリーンを通路空間に配置し、「匂い」のスクリーンに接するように居室を配置した。リビングは中庭を介して差し込む日光を最も享受できる場所に配置した。こうすることで、「匂い」を発露し、感じられるプランニングとなる。

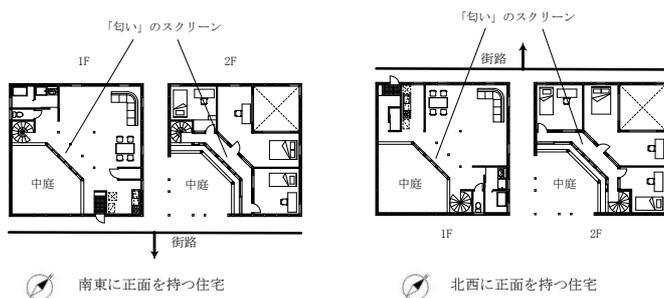


図3 「匂い」と暮らすプランニング

5. 建て替え後に隣接する住宅に与える影響

建て替わる1軒の住宅の隣人達は、建て替わった直後は直接的な影響を感じる訳ではない。どんな人が住んでいるのか、どんな住宅が建っているのかというような疑問を抱くだけである。

そして建て替わった後、約半年経つと隣人達は建て替わった住宅から発露する自由な「匂い」に気付き始め、前まで気まづかった隣地境界部においての隣人との気まづさもなくなる。

さらに、約1年経つと隣接する住宅の住人は気まづくなくなった空間で何かをしようと考え始める。そうすることで、隣接する住宅からも生活感が現れ始める。そして、隣人達も新興住宅地特有の「匂い」の魅力を感じるイキイキとした暮らし方へと変わっていく。



写真 5,6 隣人から現れる生活感

このように、少しずつ新興住宅地での暮らしが変わっていくことで、建て替わった住宅に影響を受けた新興住宅地に住む住人が建て替えを行う際に、本設計で提案する住宅の要素を部分的にでも反映した住宅を建てることも期待できる。



写真 7,8 住宅が1軒建て替わった後の新興住宅地

6. まとめ

「匂い」溢れる中庭、隣人の「匂い」を誘発するボリューム、「匂い」のスクリーン、「匂い」と暮らすプランニングによって、「匂い」の魅力を感じ、発露する住宅とすることが出来た。そして、1軒の住宅が建て替わることで隣人の「匂い」を誘発し、新興住宅地特有の「匂い」の魅力強化し、周囲の住宅に影響を与える住宅とすることが出来た。

結果として、1軒の住宅が建て替わることで、その住宅の住人だけではなく、周囲の住宅の住人にも影響を与え新興住宅地特有の「匂い」の魅力に気付き、その魅力を強化出来る戸建て住宅を提案出来た。

7. 引用参考文献

*1 広辞苑(2016/02/04 取得)

*2 goo 辞書(2016/02/04 取得)

<http://dictionary.goo.ne.jp/jn/166238/meaning/m0u/>

*3 Google マップ(2016/01/16 取得)

<https://www.google.co.jp/maps>